

産直による三陸沿岸の農業振興

—— オープン5年目を迎えたJAいわて花巻「母ちゃんハウスだあすこ沿岸店」 ——

主任研究員 小針美和

岩手県大槌町の津波被災地で、甚大な被害からの復興を目指し、岩手県沿岸部では初となる農協直営の農産物直売所として2016年1月に開設された、JAいわて花巻「母ちゃんハウスだあすこ沿岸店」(以下「だあすこ沿岸店」)。(注)産直を核とした農業振興の取組みについて、オープン5年目を迎えた現地の様子をレポートする。

1 交通インフラの整備が進んだ2019年

岩手県大槌町は沿岸部に中心市街地があり、人口も集中していたため、東日本大震災による津波被害は特に深刻なものであった。死者1,286人(震災関連死を含む)、住居倒壊率は65%近くに達し、商店数は震災前の約5分の1にまで減少した。

町では、大槌町復興計画において、基本理念として「海の見えるつい散歩したくなるこだわりのある『美しいまち』」を掲げ、復旧・復興に取り組んでいる。甚大な被害からの復興には多くの困難を伴いつつも、一步ずつ前に進んでおり、震災から8年が経過した19年は、特に、交通インフラの整備が進んだ。

まず、19年3月に、釜石自動車道が全線開通し、岩手県内陸部から片道2時間以上かかっていた沿岸部への移動時間は30分近く短縮された。また、三陸自動車道も19年1月に大槌ICと山田南IC(8.0km)間が、6月に釜石北ICと大槌IC間が開通し、岩手県宮古市から宮城県気仙沼市まで、沿岸部を南北に高速道路一本で縦断できるようになった。

2 だあすこ沿岸店の来客数・売上げも増加

だあすこ沿岸店は、新たな町の玄関口となる大槌ICと、IC出口と町の中心部を結ぶ県道

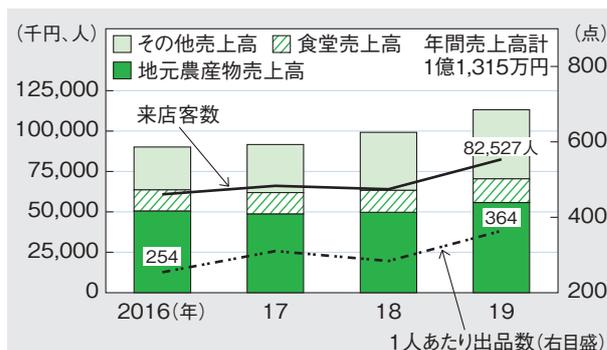
大槌小国線が交差する場所に立地している(第1図)。道路開通に加え、直売所周辺の復興工事の進捗もあってだあすこ沿岸店へのアクセスは格段に向上し、19年に来客数は大きく増加した。年間延べ来客数は、16年のオープンから3年間は6万人台であったが、19年は8万2千人を超えており、町外から足を運ぶ人も増えたと考えられる(第2図)。

第1図 だあすこ沿岸店所在地



資料 国土地理院「地理院地図」、国土交通省都市局「復興支援調査アーカイブ」データをもとに作成

第2図 だあすこ沿岸店実績データ



資料 JAいわて花巻提供資料をもとに作成
(注) 1人あたり出品数は各年12月中のデータ。

来客数の増加に比例するように、年間売上高も増加し、19年は1億1,315万円と1億円を超えた。

3 地域ぐるみの産直振興

売上高の内訳をみると、19年は、特に、地元農産物(組合員が生産・出荷した農産物)の販売が大きく増えた。常時出荷している組合員の数は毎年おおむね30人前後で大きな変化はないものの、出荷者1人あたりの出品数(12月の月間出品数)をみると、オープン年の16年では254点であったが、19年には364点に増加、出荷量だけでなく、棚に並ぶ野菜の種類も増えている(第2図)。

JAいわて花巻では、直売所のオープンに向けて周年での出荷体制を構築するため、14年2月に「JAいわて花巻沿岸産直部会」(以下「部会」)を設立、釜石・大槌地域農業振興協議会(農業改良普及センター、JA東部地区営農センター、行政等による連携組織)と連携し、産直に適した農業への支援を継続している。

そのひとつが、年4回実施される「園芸相談会」である。部会員が集まり、種苗会社の担当者を講師とする産直に適した品目や推奨品種、栽培のポイントの講義や、普及センターによる農薬の適正使用に関する講習を受けるとともに、会員相互の情報交換を行う。

例えば、部会の設立間もない頃、沿岸部の温暖な気候に合わせた品目として提案された冬どり(12～1月に収穫、3月まで出荷可能)のキャベツは、作付品種の見直し等を重ねながら栽培が継続されている。また、隣接する釜石市が会場のひとつとなった19年ラグビーW杯に合わせ、ラグビーボールの果形をした食用

カボチャ(「ロロン」、「白栗」)を生産・販売。消費者にも身近な食材で、生産者にとって作りやすく日持ちもよいかぼちゃやズッキーニは、新たな品目として今後の期待が高まっている。

大槌町も、「大槌町農産物生産振興事業」を措置し、沿岸産直部会員等による種苗の購入、ビニールハウス設置や修繕等の生産資機材の調達に対して助成を行うなどして、産直の振興を後押ししている。

沿岸部は農地が狭小で大消費地からも遠いため、農産物の多くは地域内で消費されている。しかし、津波により地元のスーパーの多くが流失し、釜石市にあった青果市場も廃業に追い込まれるなど、震災直後は売り先がなくなり、生産者の生産意欲も減退しつつあった。新たな直売所の開設をきっかけに、産直に適した商品づくりが進み、消費者の喜ぶ顔が直接見えるようになったことは、生産者のモチベーション向上にもつながっている。

4 次のステップに向けて

だあすこ沿岸店の阿部成子店長は「交通アクセスがよくなり、生産者から集荷できる農産物も、町外から足を運ぶお客様も増えた。これからは、お客様にリピートしていただくことが重要。だあすこ沿岸店では、毎年10月に収穫祭を行うほか、20年からはオープン日に合わせて1月に誕生祭を行っている。冬には、産直間交流を活用してみかんの詰め放題なども実施しているが、これからは大槌の良さを生かした新しいイベントなども企画していきたい」と語る。

20年3月には、19年10月に台風19号の被災を受けて再び不通となっていた、町の中心部を走る三陸鉄道リアス線が全線運行再開された。中心部におけるまちづくりの進捗とともに、人の往来が増加することも期待される。今後の取組みに注目していきたい。

(こばり みわ)

(注)だあすこ沿岸店の開設については、拙稿「地域復興の拠点を目指して—JAいわて花巻『母ちゃんハウスだあすこ 沿岸店』オープン—」『農中総研 調査と情報』web誌、2016年3月号を参照のこと。